

## 旅をする鳥-シギ・チドリ類-が伝える”博多湾湿地群の重要性”

富田宏<sup>1</sup>, \*服部卓朗<sup>2</sup>, \*清野聡子<sup>3</sup>

<sup>1</sup>九州大学大学院システム生命科学府, <sup>2</sup>NPO 法人 ふくおか湿地保全研究会, <sup>3</sup>九州大学工学研究院

博多湾は九州北西部に位置する湾であり、その沿岸は 1470000 人が暮らす福岡市が取り囲んでいる。博多湾は過去 100 年の間に著しい変容を遂げてきた。特に 1950 年代以降は沿岸地域の埋め立てが大規模に進行し、1990 年代からは湾内の人工島建設が着工された。その結果、博多湾沿岸の環境は大きく変化した。しかし、博多湾には今津干潟、室見川河口、多々良川河口、名島海岸、香椎海岸、和白干潟といった沿岸の湿地環境が今でも残されている。

こうした博多湾の沿岸湿地を拠り所とする生き物の一つに“渡りをするシギ・チドリ類”がある。特に近年、このグループの多くの種は個体数が急激に減少していることが知られており、保全の必要性が高い分類群の一つとみなされている。また、このグループは、繁殖地と越冬地が地理的に大きく離れた地域に分布し、その間を季節的に移動する。そのため、このグループの保全には繁殖地と越冬地に加え、移動の途中に立ち寄る“中継地”と呼ばれる場所も保全上重要な場所の一つと考えられており、東アジア - オーストラリア地域フライウェイ パートナーシップなど、国際的な枠組みにおいて保全のための取り組みがなされている。

博多湾は、渡りをするシギ・チドリ類にとって重要な“中継地”であり、シギ・チドリが北上する春期には 48 種が、南下する秋期には 45 種が記録されている。しかし、博多湾に飛来するシギ・チドリ類もまた経年的に種数、個体数が減少している。博多湾ではこれまで、シギ・チドリの保全について当地で観察される個種数や個体数を根拠に、和白干潟を中心とした保全の在り方が考えられてきた。しかし経験的な仮説として、博多湾に残るそれぞれの沿岸環境ごとに異なるシギ・チドリ類の群集が形成されていることが指摘されてきた。

私たちは、福岡市が実施する博多湾開発事業の環境影響評価書について、1979 - 2010 年まで断続的に得られている環境調査データを再解析した。また、1998 年以降の調査データについては、私たちが実施したシギ・チドリ類の調査データも解析に加えた。解析は、今津干潟、室見川河口、多々良川河口、名島海岸、香椎海岸、和白干潟、人工島内に出現した湿地の計 7 地域について行い、春季の渡りと秋季の渡りを区別して各地域のシギ・チドリ群集の類似性について評価した。

解析の結果、博多湾の各地域に飛来するシギ・チドリ群集は、春の渡りにおいては 2 つのクラスター (A: 今津干潟・人工島内, B: 室見川河口・多々良川河口・名島海岸・香椎海岸・和白干潟) に、秋の渡りにおいては 3 つクラスター (A. 今津・人工島, B. 名島海岸・香椎海岸・室見川, C. 多々良川・和白干潟) に分化していることが明らかになった。

解析の結果、「博多湾に残るそれぞれの沿岸環境ごとに異なるシギ・チドリ類の群集が形成されている」という仮説は支持された。このように群集の組成が各地域で異なることは、それぞれの沿岸湿地の性質を反映していると考えられる。また注目すべき点として、解析の結果はこれまでシギ・チドリ類の飛来地として重要視されていなかった地域で、他の地域とは異なるシギ・チドリ類の群集が形成されていることを示した。また、こうした場所の異質性は春季と秋季の渡りで異なっている。そのため、博多湾のシギ・チドリ類の多様性を保全するためには、博多湾に残る沿岸環境 - 博多湾湿地群 - を保全対象とし、その在り方を考えていくことが必要である。